



OSAKAFUSYAKYO

リ エ イ ト

発行

社会福祉法人 大阪府社会福祉協議会 老人施設部会

〒542-0065 大阪市中央区中寺1-1-54 大阪社会福祉指導センター内
TEL:06-6762-9001 FAX:06-6768-2426

発行日

令和5年6月

誰もが安心して暮らせる地域を目指して

大阪府社会福祉協議会 老人施設部会の会員施設が、「私たちは、この地域(まち)を支えます」をフレーズに始めた社会貢献事業(生活困窮者レスキュー事業)は、令和5年度に20年目を迎えます。

これまで、会員施設は、“社会福祉法人の使命”として、制度の狭間の生活困窮に対する経済的援助(現物給付)や、施設のコミュニティソーシャルワーカーと連携し相談支援を実施する社会貢献支援員の配置等、先駆的な取り組みを実践してきました。また、地域の課題やニーズに向き合い、施設の専門性や強みを生かしながら、様々な地域貢献活動にも尽力してきました。

さらに、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、物価や光熱費高騰の厳しい状況にあっても、関係機関・団体と協働し、目の前の課題解決に向けて幅広く地域における公益的な取り組みにチャレンジしています。

このような社会貢献活動にがんばっている法人・施設の取り組みを知っていただくことで、施設関係者においては、地域における公益的な取り組みの具体的な実践の参考にさせていただきたい。また、福祉を学んでいる学生をはじめ福祉に興味・関心をお持ちの皆さんにおいては、地域福祉の担い手として取り組んでいる社会福祉法人が、あなたの身近にあることを知っていただきたい。

このような願いと期待をこめて、豊かな実践が広がることを目的にこの実践事例集を作成しました。発刊にあたり、あらためて、事例に関する取材や関係資料の提供にご協力いただきました皆様に厚くお礼申し上げます。

社会福祉法人 大阪府社会福祉協議会
老人施設部会長 西田 孝司

CONTENTS

SOCIAL ISSUES

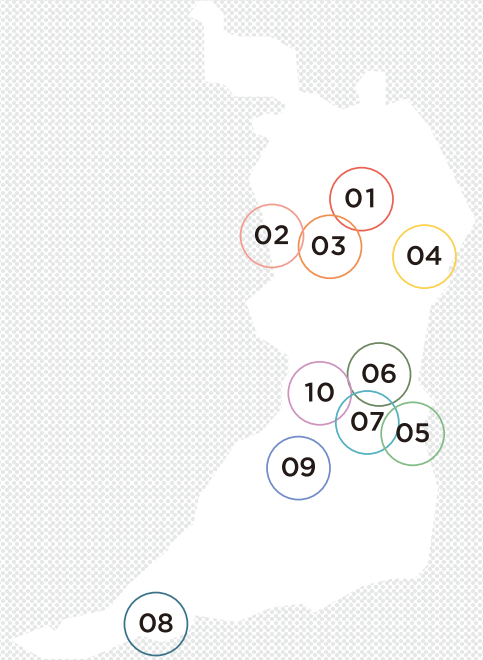
コロナが及ぼした社会的な影響 05

ACTION

- 01 住民主体じゃなければ意味がない！
UR団地住民の心と体を活性化
庄栄エルダーセンター(社会福祉法人 秀幸福祉会)茨木市 06
- 02 リアカーでパンを売って!?
地域の見守り活動
みずほおぞら(社会福祉法人 大阪府社会福祉事業団)豊中市 08
- 03 福祉体験学習を兼ねた
学生アルバイト
あす〜の吹田(社会福祉法人 秀明会)吹田市 10
- 04 認知症カフェで
介護者の居場所作り
さんもくせい(社会福祉法人 もくせい会)交野市 12
- 05 中間的就労の受入れで
地域の就労課題に貢献
大阪好意の庭(社会福祉法人 日本コインノニア福祉会)柏原市 14
- 06 子ども食堂を支援する
地域拠点
地域支援事業なないろ(社会福祉法人 八尾隣保館)八尾市 16
- 07 脳トレ教材の配布で
高齢者の閉じこもり支援
ソーシャルリレーション推進室(社会福祉法人 みささぎ会)藤井寺市 18
- 08 地域住民の孤立を防ぐ
移動販売車
特別養護老人ホームせんわ(社会福祉法人 せんわ)泉南市 20
- 09 困っている全ての人へ食を
「みんなの食堂」
福生園(社会福祉法人 福生会)堺市 22
- 10 朝食をとおした
子どもの第三の居場所
ふれ愛の館しおん(社会福祉法人 四恩学園)大阪市 24

OUTRODUCTION

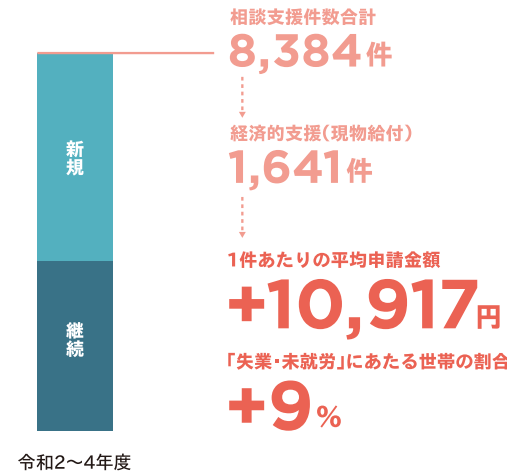
- あとがき 26
- 社会貢献事業推進委員会「新たなステージを考える事業研究小委員会」 27
- 掲載団体一覧 27



コロナが及ぼした社会的な影響

SOCIAL ISSUES

大阪しあわせネットワーク 総合生活相談事業*の実績 ※生活困窮者レスキュー事業



令和2年度～令和4年度の相談支援件数は、新規4,997件、継続3,387件、合計8,384件となっており、相談支援事例のうち、「経済的援助(現物給付)」による支援を行ったものは、1,641件(金額133,992,391円)となっている。

新型コロナウイルス感染症が流行する前の令和元年度と比較すると、経済的援助の1件あたりの平均申請金額が増加傾向にあり、令和4年度に至っては、10,917円増加している。さらに経済的援助を行った世帯の主な特徴に占める「失業・未就労」の割合が9%増えており、生活困窮の厳しさがうかがえる。

[出典]大阪しあわせネットワーク事業報告書(令和元年度～令和4年度)

緊急小口資金および 総合支援資金の貸付実績



新型コロナウイルス感染症の影響による休業や失業で、一時的な生活資金にお困りの方に向けた「緊急小口資金及び総合支援資金(生活支援費)の特例貸付」の貸付実績について、令和2年度～令和4年度の大阪府内の件数は、合計493,229件(金額198,215,635,000円)となっている。

[出典]大阪府社会福祉協議会 生活支援部の調べ(令和5年3月)

高齢者施設関連の クラスター状況



大阪府内の高齢者施設関連におけるクラスターは、第二波(令和2年6月14日～)から発生しており、第八波(～令和5年4月23日)までの累計で、陽性者数は76,260人、施設数は4,607箇所となっている。特に、第六波と第七波(令和3年12月17日～令和4年9月25日)の合計で、陽性者数の半数を占める。

[出典]大阪府新型コロナウイルス対策本部会議の資料をもとに、事務局が算出した

住民主体じゃなければ意味がない！ UR団地住民の心と体を活性化

庄栄エルダーセンター(社会福祉法人 秀幸福社会)



築60年のUR団地内の自治会が解散したことで、高齢者の孤立・孤独の問題が深刻に。「何か楽しいことをしたい」「団地を盛りあげたい」という気持ちはあっても、「誰がするの?」「自分は無理よ」など、問題解決に対し敬遠されていた。そこで、団地住民や地域福祉の担い手、関係機関が集まって取り組みを開始。活性化に向けたアイデアを出し合い協議を重ねた結果、住民の声を聴く場や「昔懐かしの写真展」の開催、団地住民向けの情報紙の発刊などにこぎつけた。これらのプロジェクトは現在進行形！自治会組織がなくても「元気の団地」を目指している。

活動の進め方

- 1 市、市社協、民生委員、福祉委員などの関係者と問題を共有し団地に特化した課題を議論
- 2 毎月定例のミーティングを団地住民を加えた「維持寺団地支え合いミーティング」に改称して開催
- 3 団地の困りごとや想いを語り合い何ができるかアイデアを出し合った結果まずは協働して実践することに

取り組み内容

- 住民の声を聴く場 **よりそい相談会**
- 団体の話題を掲載する情報紙 **よりそいニュースレター**
- 賑わっていた時代の写真を集めた **昔懐かし写真展**
- 住民の集いの場 **カフェよりそい**

定量的な成果

よりそいニュースレター配布数
6,400枚/年
(年4回発刊)

昔懐かしの写真館の来場者数
140人/2日間
(よりそい相談会を月2回開催し、毎回2-3人の参加がある)

その他の成果

様々な取り組みから
人と人との繋がり、顔の見える関係性、
お互いを気遣う気持ちが生まれた。

写真展をきっかけに、
あらたに「カフェよりそい」がスタート。
「こういう場を待ってました～」と
楽し気に話が飛び交っている。



なかお いわお
中尾 巖 氏(左)
秀幸福社会 理事長

かみの きよし
神野 享士 氏(右)
コミュニティソーシャルワーカー

社会福祉法人がやらないと誰がやる！

この団地は、自分(中尾理事長)が小学校1年生の時からある建物。住んでいる人が高齢と言うのは分かっている。困っている人がいるのも分かっていた。だから動いたのです。我々は芸能人じゃないので、相手から寄ってこない！我々から寄っていかないと接点は持てない。しかし、単体で動くのではなく、色んな人を巻き込んでいかないといけない。そして我々のやっていることを見える化し、どの団体よりも社会福祉法人がやらないといけない。それが使命だと考えています。

リアカーでパンを売って!? 地域の見守り活動

みずほおおぞら(社会福祉法人 大阪府社会福祉事業団)



リヤカーって、いつの時代?!という驚きから、ゆっくりと地域を歩いて回れること、1時間程度の巡回時間なので、施設の職員さんも無理なく継続できること、活動を始めるとあたってのコストがあまりかからないことなど、リヤカー巡回活動が理に適った取り組みである、と納得に変換。巡回の合間に、安否確認として個別訪問を自治会の方と協働して行い、気づけば1回の巡回で15人前後の方とあいさつを交わし、パンの販売を心待ちにしてくれる方もできるなど、地域になくはない活動になっています。

活動の進め方

- 1 地域公益事業推進委員会で話しあい、私たちのできる貢献とは何かについて、地域と施設の目線を合わせ
- 2 令和3年6月から「リヤカー」まちぐるみ号での巡回販売を本格稼働
- 3 徐々に地域の社会資源・人々とつながりができはじめる
- 4 地域の見守り活動との連携や、パンを心待ちにされる人も出てきて、なくてはならない活動に

定量的な成果

リヤカー巡回回数
約**90**回/2年間

巡回時に交流する人数
1回の巡回時に約**15**名
年間延べ約**750**名

その他の成果

施設のお隣にある企業がリヤカーをカスタマイズしてくれたり、近隣コンビニのオーナーがテーマソングを作成してくれたり、地域の社会資源とのつながりができた

施設職員のモチベーションアップと地域の人々にとって身近に福祉施設があるという安心感につながっている



たけうち しんや
竹内 真也 氏
主任生活支援員

地域の一員として貢献できることって?

アイデアを出し合う中、リヤカーを引っ張って、パンを売り歩いては、という案が浮上。面白い!インパクトがある!ことと、継続就労支援A型で作っているパンを地域の方に届けることもできる。まずはやってみよう!、で始めました。担当部署だけでなく、「施設」として活動するというコンセプトのもと、介護員、栄養士、事務員も取り組みに参画し、一体感が高まっていると感じています。

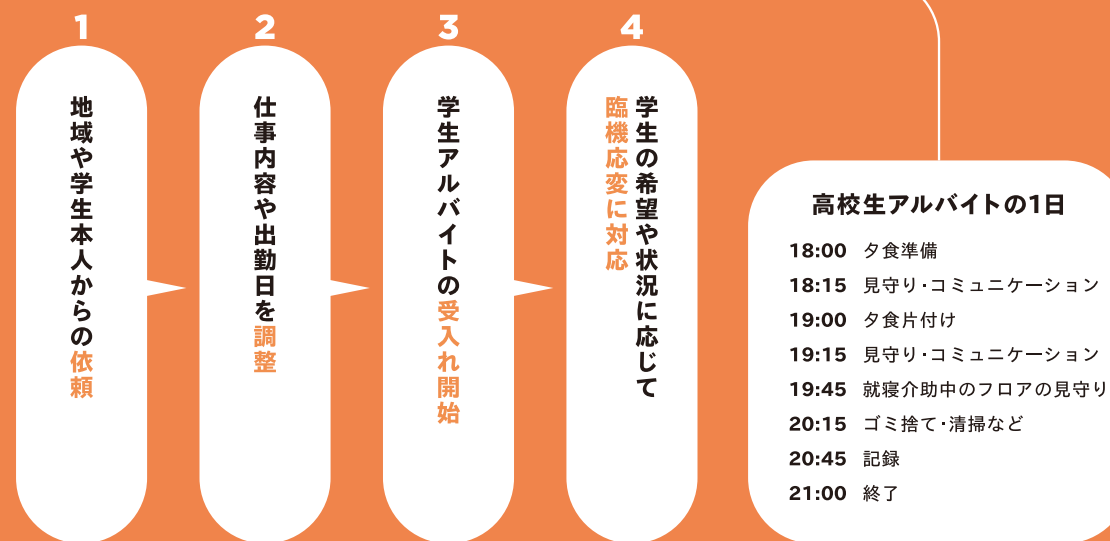
福祉体験学習を兼ねた 学生アルバイト

あす〜る吹田(社会福祉法人 秀明会)



日頃よりお世話になっている、地域の青少年指導員より「学生がアルバイトできなくて困っている。どの業界も大変やと思うけど良い方法ないかな？」と相談がありました。施設は以前から学生アルバイトを募集しており、多くの実習生の受入れの実績もあることから、感染対策しながらの受入れは可能と判断。施設側にとって夕方や土日祝のアルバイトは、人手が助かる一方で、学生もその時間帯は働きやすい“WIN WIN”の関係が成立。他にも大阪府社協のホームページでの募集を目にしたことで、アルバイトの受入れのきっかけになった。

活動の進め方



定量的な成果

学生のアルバイト総時間数
約2,400時間

全員が飲食店でアルバイトをしていて、コロナでシフトが無くなり困っていました。出勤日は学業やクラブ活動に支障が出ないように配慮し、仕事の内容も補助的な仕事から、軽介助へ少しずつステップアップしています。

その他の成果

施設側のメリット
若い学生の存在は、ご利用者にとっても喜ばれます。職員の指導力も磨かれ、世代間ギャップについても学べます。

学生側のメリット
掃除や洗濯、配膳など家事を学べます。高齢者や幅広い年齢層の職員とのコミュニケーションを通じて、多様性が身に付きます。

意外な反応
親御さんより「子供がアルバイトを始めてから、自宅でも家事をしてくれるようになった」とお礼を言われました。



よしひさ まさき
吉久 正規 氏
法人本部 統括部長

“WIN-WIN”になれるようコーディネートする

地域でPTAや福祉委員をしているので、地域からのニーズをキャッチしやすいです。コロナ禍で地域との交流の機会が減少していたので、小学生～60歳以上のシニアまで多世代交流を目的にしたフットサル活動を立ち上げました。「あす〜る子供クラブ」は子供達が福祉施設のご利用者として接する事で、自分とは違う価値観を理解しあい、共に支えあう「福祉の心」を学ぶ福祉体験学習を目的とした活動です。どんな活動でも楽しく継続するには、それぞれの立場でメリットがある“WIN WIN”の関係になる事が大切です。

認知症カフェで 介護者の居場所作り

きんもくせい(社会福祉法人 もくせい会)



「私たちが新たに地域との関わりを作れば、もっと地域の困りごとを知る事ができて、お役に立てるのでは・・・。」これが認知症カフェを始めたきっかけです。カフェを運営するうえで、独自のマニュアルを作成し、委員会を設置しました。マニュアルの表紙には、スタッフが大切にしたい想いが記載されています。「主役はあくまで認知症の方とご家族。家族同士や地域の結びつきが大切。」毎月の委員会では、いかに楽しく参加できるか？参加者は何を求めているか？広報活動など、カフェが盛り上がっていくための話し合いをしています。

活動の進め方

- 1 国が新オレンジプランで認知症カフェ開設を推進
- 2 市外で活動している認知症カフェを視察
- 3 交野市初の認知症カフェをスタート
- 4 地域の重要なサービス資源として認知される

認知症カフェとは？

認知症の方やそのご家族、地域住民、介護職員など誰もが集える場所です。気軽に悩み相談や世間話などができるコミュニケーションの場として全国各地で運営されています。2020年度の調査では47都道府県1,518市町村にて、7,737カフェが運営されていることが発表されています。

定量的な成果

これまで参加された人数
約800名
(平成28年～令和4年)

これまで80回以上開催し、参加された人数です。参加していただくための工夫として、毎回イベントを企画しています。

その他の成果

男性参加者同士が
カフェ以外でも食事をする関係に

介護で不安な参加者に
専門職による助言と関係機関への紹介

介護疲れで元気のない参加者が、
周りの参加メンバーから励まされ前向きに

カフェに参加しているほとんどの方が
一人ではないというつながりを実感



いしい ともゆき
石井 智行 氏
コミュニティソーシャルワーカー

介護者を元気にしたい

多くの認知症カフェでは、感染に対する不安から活動の休止等で、これまで築かれた関係やつながりが途切れてしまう状況になりました。しかし、関係者から「交流カフェはしていますか？」「参加したいんですけど・・・」という参加や開催を望む声が多く聞かれました。コロナ禍をはじめ、今後も災害や感染症等により、様々な制約が生じることが想定されます。社会福祉法人として、そのような状況においても、認知症カフェでのつながりで元気になる介護者の方を1人でも増やしたいという想いをもって取り組んでいきます。

中間的就労の受入れで 地域の就労課題に貢献

大阪好意の庭(社会福祉法人 日本コイノニア福祉会)



大学を卒業してから就職せずに自宅で過ごしていた23歳の男性。心配した母親が自立相談支援機関に相談。彼は自分で考えて行動する事や、自分の気持ちを伝える事が苦手だった。耳が少し聞こえにくく、前からゆっくり話してくれないと分からない事があった。訓練目標は自分に自信を持つ事。いざ中間的就労の訓練が始まると、彼は理解力が高く訓練内容をすぐに覚える事ができた。彼の周りの職員は彼の自立を強く意識し、過剰なサポートにならないよう出来るだけ見守りに徹した。訓練の日が経つにつれ「少し自信が出てきました」と変化が見られた。

活動の進め方

- 1 大阪府に認定就労訓練事業の申請
- 2 就労支援担当者養成研修を受講
- 3 中間的就労訓練生を受入れ
- 4 一般就労へステップアップ

中間的就労とは？

すぐに一般就労することが困難な方のために、大阪府から認定を受けた就労訓練事業所で軽い事務作業や清掃作業などの訓練を受け、生活のリズムをつくり、一般就労を目指す「就労訓練事業」のこと。

定量的な成果

中間的就労の受入れ件数

4件

2015年(平成27年)に生活困窮者自立支援法が施行され、これまで大阪府内の認定就労訓練事業所での中間的就労受入れ件数は110件あります。日本コイノニア福祉会ではこれまで4件の中間的就労の受入れをしてきました。

その他の成果

4ヵ月後には事務の一般就労にステップアップ

今回の中間的就労の内容は、特別養護老人ホームでの洗濯業務で受け入れました。2日/週 PM13~15(2H) 非雇用型(500円/時)でスタート。訓練途中で訓練日数や時間が増えました。4ヵ月後には事務の一般就労にステップアップしました。



たかつ ともこ
高津 智子 氏
就労支援担当者

コロナであろがなからろが

以前から法人として社会貢献活動に積極的に取り組んできました。大阪しあわせネットワークの活動をはじめ、生活困窮者に対しての夜回り活動やおにぎりやお弁当の配布、地域の健康フェア等にも参加してきました。中間的就労の訓練生は自立相談支援機関や就労準備事業を経て紹介されるので、関係者と連携協力しながら進める事ができる安心感があります。コロナであろがなからろが、地域で働きづらさを抱えた方の中間的就労の依頼があれば、これからも訓練生を温かく受け入れていきたいと思っています。

子ども食堂を支援する 地域拠点

地域支援事業「なないろ」(社会福祉法人 八尾隣保館)



社会福祉法人八尾隣保館では、全国食支援活動協力会と連携し、令和3年6月より食支援活動の地域拠点(ハブ拠点)としての活動が始まりました。大阪市内の食支援活動の中核拠点(ロジ拠点)に食材やおもちゃなどをデイサービスの車で取りに行き、それらを八尾市内の子ども食堂を運営している10か所の団体等へ月1~2回届ける活動を行っています。この食支援活動にあたっては、八尾市担当課とも連携しながら、新型コロナ禍においても継続的に取り組み、子ども食堂の運営支援の一助となっています。

活動の進め方

- 1 母子生活支援施設の有志の勉強会にて全国食支援活動協力会の活動を知る
- 2 法人内で地域支援活動「なないろ」と連携して取り組むことを決定
- 3 市内子ども食堂の情報収集 八尾市担当課との協議 ロジ拠点との連携
- 4 ハブ拠点として、子ども食堂の支援団体への支援開始(月1~2回)

地域支援事業「なないろ」

八尾隣保館では、令和3年度より地域支援を推進するプロジェクトチーム「なないろ」の活動がスタートしました。「なないろ」では、食支援活動の他、生活困窮者レスキュー事業、居住支援や法人後見、中間的就労などさまざまな地域支援活動の取り組みを推進しています。

定量的な成果

八尾市内の10か所の子ども食堂への食支援回数

20~30回/年

その他の成果

地域の困りごとのアンテナとなった

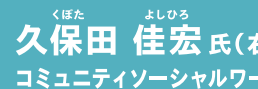
子ども食堂が地域の困りごとや生きづらさを抱えた家庭の発見者となり、社会福祉法人に相談してもらうことによって、専門的な支援につなげるようになった。

子ども食堂同士の関係づくりのきっかけ

食支援活動を通して、顔見知りの関係ができ、子ども食堂の支援団体同士の連携が図れるよう、LINEを活用しお互いの困りごとを支援できる関係づくりがスタートしています。



たむら まさかず
田村 将一氏(左)
コミュニティソーシャルワーカー



くぼた よしひろ
久保田 佳宏氏(右)
コミュニティソーシャルワーカー

「お節介日本一」の八尾へ

食支援活動はじめ「なないろ」の活動は、「つながる」がキーワードです。一つのつながりが一人一人の福祉課題を解決するきっかけになり、そのつながりが多くなればなるほど、福祉でまちを活性化することになると考えています。「なないろ」の名称は、職員50近い応募の中から決めました。地域支援事業をととして、地域のみなさんが虹のように明るく、彩り豊かな実りのある人生を送れますようにという願いを込めています。これからは誰一人取りこぼさない地域づくりに取り組んでいきたいと思っています。

脳トレ教材の配布で 高齢者の閉じこもり支援

ソーシャルリレーション推進室(社会福祉法人 みささぎ会)



30年以上、地域の元気な高齢者に対して 介護予防教室を開催。この教室は定期的に地域の公民館にスタッフが出かけ、在宅で介護に困っている方に対してアドバイスをしたり、認知症予防の啓発活動を行うなど、地域で高齢者が元気に暮らしていく為の活動を実施。教室は大阪府の藤井寺市・堺市の21地区で展開。コロナ前は年間500人以上が教室に参加。コロナ感染拡大で教室の開催自体が困難になったが、地域の民生委員さんと協力し、脳トレ教材を配布。自宅で閉じこもっている方の安否確認やニーズの把握をする事ができた。

活動の進め方

- 1 法人内で
社会貢献を行う
専門部署を
立ち上げる
- 2 出前型介護予防
教室を
定期的
に実施
- 3 コロナ禍で
脳トレ教材の
配布に切り替える
- 4 地域の要望により
出前型介護予防
教室を再開

ご協力くださった 民生委員さんの声

コロナ感染拡大で地域での定期的な会合が無くなり、地域の方の安否確認が難しくなった。この脳トレ教材は自宅へ訪問した際のコミュニケーションのきっかけになるので、大変役に立っている。コロナ禍においても、これまでの地域との関係性がなくなる事が大切だと思う。

定量的な成果

脳トレ教材を配布した人数
約 **1,100** 件/年

教材を渡した方々の声

日課で毎朝散歩に行くようになった。

直接手渡して届けてくれたから
ちゃんとやろうと思えた。

月に1度、訪問してもらうことが
良い気分転換になった。

訪問してもらうようになってから、
服装や会話の内容を考えるようになった。



みちもと なおゆき
湊本 直志氏
コミュニティソーシャルワーカー

民生委員さんがすぐにOKしてくれた

法人設立以来、介護予防教室を実施してきたので、コロナによる教室の中止は心苦しかったです。何とかこれまでの地域の方との関係性を継続したいという思いから、脳トレ教材の配布をすることになりました。最初は「民生委員さんに負担を掛けてしまうのでは？」と不安に思っていたのですが、民生委員さんに「脳トレ教材の地域への配布を協力して欲しい」と依頼した時に、すぐにOKしてくれた事は嬉しかったです。地域の方から教室再開の声が増えてきているので、感染対策を実施しながら少しずつ再開しています。

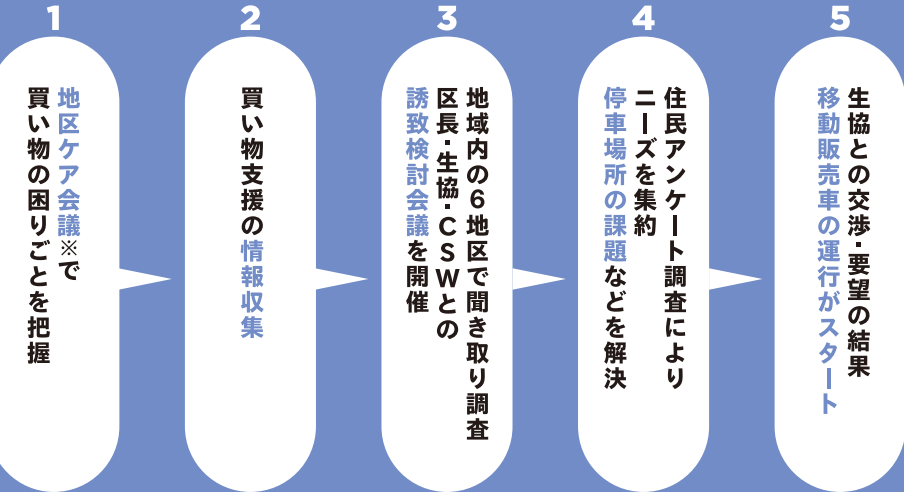
地域住民の孤立を防ぐ 移動販売車

特別養護老人ホームせんわ(社会福祉法人 せんわ)



泉南市信達葛畑地区は、山間の10軒ほどの集落。この地区で令和3年3月から「コープお買物便」の運行が始まった。地域内の個人商店らの廃業が相次ぎ、住民の高齢者の運転免許返納も進む中、買い物の困難さが切実な問題になっていた。地域内の6地区の区長に聞き取り調査を行ったところ、同様の課題を抱えていることが判明。他市で移動販売の実績がある生協へ相談しながら、6地区で誘致に関する住民アンケートを実施。アンケート結果を理由に誘致を要望するとともに、地区の駐車場の確保にも努め交渉を重ねた結果、運行にこぎつけた。

活動の進め方



※ CSWが主催し、毎月専門職と住民代表が集まり、要支援者の検討や地域課題について協議する場。
参加者は泉南市長寿社会推進課、社会福祉協議会、地域包括支援センター、民生委員、地区福祉委員など。

定量的な成果

参加者合計
1,400名
令和3年3月～令和5年3月

移動販売車は週1回運行。2地区で実施し、平均7~8名が一つの地区に参加している。商品を手に取り目で見えて買い物ができることが楽しんでいる。

その他の成果

地域住民の孤立防止と 支え合いが生まれている

週1回住民が集う場となり、住民同士の交流の機会にもなっている。荷物を持ちあったり、乗車の際に手助けするなど、自然な形で助け合いが行われ、地域のつながりを保つことに一役買っている。



はやし のぶゆき
林 信好氏
コミュニティソーシャルワーカー

社会福祉法人の役割は地域支援

せんわは専任のCSWを配置し、以前は社会貢献支援員の常駐先でもあり、古くから社会貢献事業に取り組んできました。大切にしていることは「出向くこと」。住民対象の健康講座の講師や、地区福祉委員等が主催する住民つどいの場(サロン)への支援、小学校の児童の通学見守り、学校のイベントに地域住民と一緒に参加しています。これらを通して、様々な人と顔の見える関係を築き、あらたなニーズをキャッチすることや、地域福祉の担い手を支援しています。

困っている全ての人へ食を 「みんなの食堂」

福生園(社会福祉法人 福生会)



創立70年、今も創立者の理念を守り、ささやかな社会貢献として余分に給食を作って必要な方に提供している。1日5食を限定に、昼食や夕食を予約不要で提供する「毎日型」と、2ヶ月に1度みんなで集まる「イベント型」の2タイプを運営。イベント型は、食事に加えてビンゴ大会や映画上映、大学生による学習支援、入居している高齢者が配膳を行うなど、様々な方の交流と社会参加の場となっている。コロナ禍では、毎日型は継続し、イベント型の代わりに「フードパントリー」を実施した。例え集まれなくても「こんな時だから必要」と考え、活動内容を変えて取り組んでいる。

活動の進め方

- 1 中区つむぎの会や
中区ラウンドカフェへ相談し
協力を呼びかけ
- 2 行政や社協、校区連合会、
校区民生委員会、
スクールソーシャルワーカー等の協力
- 3 小学校への広告配布
- 4 毎日型とイベント型の運営

「中区つむぎの会」・ 「中区ラウンドカフェ」

行政や社協、施設、企業、大学などから構成する組織。

定量的な成果

提供した食事数

363食

令和3年度

令和元年度は565食(イベント型を含む)、令和2年度は313食を提供した。20歳代で失業し家も失った方に対し、毎日型では金銭的に困窮している時期に集中的に食事・食材を提供。今では福祉の専門職のサポートを受けながら、住居も見つかり、日常生活に戻っている。

その他の成果

集うみんながハッピーに

普段は高齢者施設のため、子どもの元気な姿を見ることで、職員もボランティアもみんなが「うれしい、楽しい」と感じる空間が生まれている。また、子どもの保護者等からは、地域の学年が違う子ども同士の交流ができ、学校生活にも良い影響があったという声も寄せられた。より施設が地域にとって身近な存在となり、つながりが深まっている。



やまだ のぶひろ
山田 展裕氏
地域連携推進担当/
コミュニティソーシャルワーカー

つながりから生まれた新たな取り組み

創立者の理念である「福祉の心」を守り、地域のみなさんの少しでもお役に立てることがうれしく、それこそが社会福祉法人の本分であり、お金にはない幸せがあると考えています。また、堺市中区にある子ども食堂のネットワーク「いつつぼし」は、5つの団体が協力し合って企画や運営を行っています。助け合いの社会となるためには、人と人との交流が大切です。コロナが収まり次第、イベント型を再開するとともに、今後は、行政との共同企画により、みんなの食堂を活用したフリースクールにも挑戦したいと思っています。

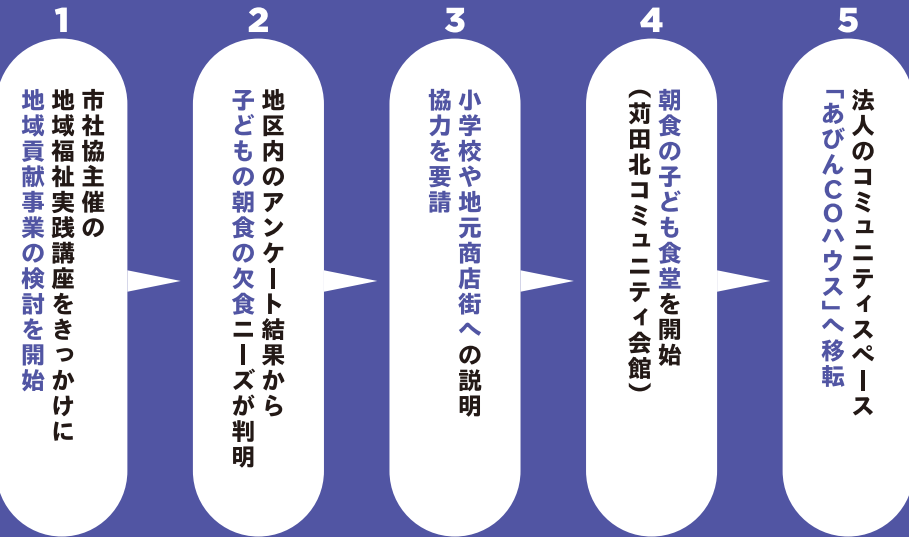
朝食をととした 子どもの第三の居場所

ふれ愛の館しおん(社会福祉法人 四恩学園)



近隣の子どもを対象に、毎週火曜日の午前7時に「あびんこモーニング」をオープンしている。地域の小学校や駅前商店街などへの説明を重ね理解を得ながら、地元の農業従事者や惣菜店、ファーストフード店が賛同し、食材を提供してくれている。運営には、地域住民のボランティアが協力をし、企業ボランティア、さらに学生ボランティアが参画するようになった。毎月第4土曜日には桃山学院大学のボランティアグループ「FIOREI」との協働による「ごちゃまぜ食堂」も開催。子どもから高齢者までが集い、あらゆる世代の交流の場となっている。

活動の進め方



定量的な成果

開催回数と参加者数

33回 383名

令和4年度

平成30年6月1日にスタートした当初の3人から、その後5人~8人となり、多いときは30人の子どもが訪れる。現在の利用者は10~12人。月1回の「ごちゃまぜ食堂」には200人が参加し、カレーライス1時間で完食する。

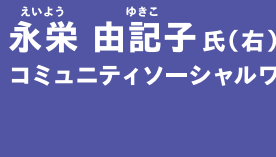
その他の成果

地域で支える地域に

参加する子どもの中には、夏休み中も朝食を食べにきたいと言う子や、中学生になっても参加したいという声も寄せられ、子どもの居場所になっている。子どもを中心に据えることで、シニアがボランティア活動を通して社会参加し、企業ボランティアの社会貢献、地元の商店の協力が得られるなど、地域で支える地域づくりにつながっている。



やりの ゆたか
鎗野 豊氏(左)
住吉区東地域包括支援センター
管理者



えいよう ゆきこ
永栄 由記子氏(右)
コミュニティソーシャルワーカー

子どもを必要な支援につなぎたい

ぬくもりのある社会の実現を目指して地域で共に生きる人たちの結び目となれるように、地域コミュニティづくりに取り組んでいます。理事長が率先して個別支援・地域貢献を実践することで、法人内や職員、ボランティアに共感が広がり、活動内容や担い手に広がり生まれています。地域交流の原点である「子ども食堂」を私たちが開催するのは、食事の提供が目的ではありません。みんなで温かい料理を囲みながら、ホッとほしい。子どもの話を聴き、課題があれば必要な支援につなぐ機能を果たしていきたい。

OUTRODUCTION

新型コロナ禍の3年間は、これまで経験したことがないような施設運営が迫られ、各施設は、感染対策が中心とならざるを得ない状況となりました。このような状況下においても、地域生活の課題に目を向け、その課題を解決しようと積極的に地域貢献活動や、公益的な取り組みを推進している社会福祉法人の姿をリアルに紹介したいという思いから、この事例集を作成しました。

今回、紹介させていただいた実践事例は、閉塞した地域社会における希望であり、私たち老人施設部会の誇りと財産です。まだまだ紹介しきれないのが残念ですが、これらの実践事例を参考に、大阪府内の各地域で実践の輪がさらに大きく広がることを願っています。

新型コロナ禍の影響で、失業、虐待、DV被害、ヤングケアラー、孤立・孤独など、個人の力では解決に至らない深刻な生活課題が多種・大規模に生じ、生活に困難を抱え、自分自身の将来に対して不安を持つ人が増えています。

私たちは、20年間取り組んできた社会貢献事業(生活困窮者レスキュー事業)の理念である「社会福祉法人への公的助成、優遇措置は制度固有のものではなく、あくまでも公益活動に対する措置であることから、公益性のある仕事を自ら開拓して展開させるところに社会福祉法人の使命があるといわねばならない」という認識を共有し、老人施設部会の中核事業として、今後も「大阪しあわせネットワーク」の活動を展開していきたいと考えています。

末筆ながら、発刊にあたって、事例に関する取材、関係資料の提供にご協力いただきました各法人のみなさまをはじめ、編集・イラスト作成に携わっていただきましたNPO法人Co.to.hana様に厚くお礼申し上げます。

社会福祉法人 大阪府社会福祉協議会 老人施設部会
社会貢献事業推進委員会
委員長 山本 智光

企画・編集

社会貢献事業推進委員会「新たなステージを考える事業研究小委員会」

山本 智光 社会福祉法人こぼと会 特別養護老人ホームいのこの里

山下 幸宏 社会福祉法人みささぎ会 特別養護老人ホームつどうホール

小山 隆博 社会福祉法人八尾隣保館 Lifeつむぎ

赤穂 光郁 社会福祉法人四天王寺福祉事業団 四天王寺悲田院

氏家 幹夫 社会福祉法人四天王寺福祉事業団 四天王寺悲田院

掲載団体一覧



社会福祉法人秀幸福社会
<http://care-net.biz/27/shouei/>



社会福祉法人八尾隣保館
<https://yaorinpokan.or.jp/>



社会福祉法人大阪府社会福祉事業団
<https://piste1.wixsite.com/mizuhooozora>



社会福祉法人みささぎ会
<https://www.misasagikai.or.jp/>



社会福祉法人秀明会
<https://azul.or.jp/>



社会福祉法人せんわ
<http://senwa.or.jp/>



社会福祉法人もくせい会
<http://care-net.biz/27/mokuseikai/>



社会福祉法人福生会
<http://www.fukuseikai.org/>



社会福祉法人日本コイノニア福祉会
<https://www.koinonia.or.jp/>



社会福祉法人四恩学園
<https://www.shiongakuen.or.jp/>